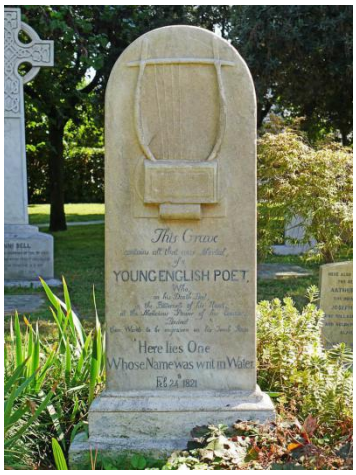
ちょっとそこまで
～お散歩日和（名言編）～

黄金のような国々を、私はたくさん旅してきた。
数々の立派な国土、王国を見てきた。　……　ジョン・キーツ

イギリスを代表するロマン派詩人ジョン・キーツと言えば、その墓碑銘「Here lies one whose name was writ in water.」もまた有名です。その意味は「水に名が書かれし者、ここに眠る。」ということになります。意味不明です。ちなみに、「writ」は誤植ではなく、「write」の過去形・過去分詞の古語です。つまり、ここでは、「written」ということになります。

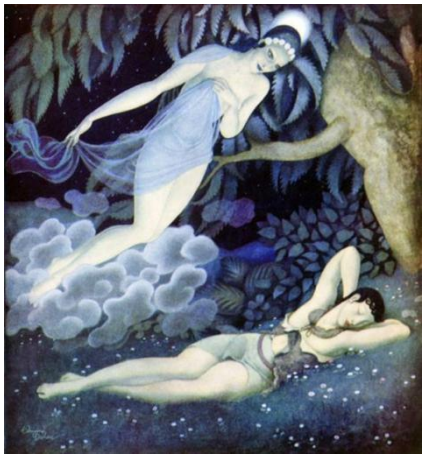
ここからは私の勝手な解釈です。その昔習った英語の決まり文句の１つに「dead in the water」というのがあります。意味は、水の中で身動きが取れないことから暗礁に乗り上げる意味で使われます。このことから類推すると「name was written in water」は、水に名前を書いても何も残らないことから、「儚く志半ばの無名の者」という意味ではないかと考えます。



冒頭の言葉は、「チャップマンのホメロスを一読して」の書き出し部分です。彼はギリシャ神話の世界に興味をもっていました。のちに「エンディミオン」で評価を得るのですが、このエンディミオンもギリシャ神話に現れるうら若き牧童です。その美しさから、月の女神セレネに愛され、ゼウスに永遠の生を与えるようにと嘆願したところ、願いは叶うのですが、それは永遠の眠りにつく姿としてであったという悲劇の主人公です。

その詩の「美しいものは永遠の歓び」もまた有名で、

太陽や月の美しさ／若葉を芽吹いて繁みとなる木々／
緑に包まれてのびのびと咲く水仙たち／灼熱の季節にも自分のために／
涼しさを生み出す小川の流れ／麝香（じゃこう）バラの咲き乱れる森の繁み／
またわたしたちが偉大な死者について／思い描く運命の壮大さ／
聞いたり読んだりした美しい物語の数々／天空の一端からわたしたちに降り注ぐ／
この悠久の飲み物／汲めども尽きぬ泉に／美しものが宿る



と、詩は延々と続いていきます。主人公のエンディミオンが、様々な地を訪れていく長編詩です。情ないことに、私はつまみ食いしかしたことはありません。

少し脱線したように思われるかもしれませんが、冒頭の言葉にある「黄金のような国々」と「美しいものは永遠の歓び」とは同じ意味ではないかと思ったので触れてみました。というのは、その字面通りに読むと薄っぺらい意味になるからです。やはり、ここでは、絶えることなく好奇心の火を燃やし続けて、いつまでも人生の様々な姿を探り、感受性を深め、思想を豊かにしていくことの比喩と捉えるべきでしょう。

つまり、「黄金のような国」とは、自分の目の付け方次第で至る所に見付けられるはずの、音楽の国、美術の国、哲学の国、文学の国、科学の国…を指している言葉だと思います。人生という道程を歩む旅人たちが、自身の感受性で発見し体験する

多種多様な魅力や知識、それこそが黄金の輝きです。

とは言え、人は誰しも年齢を重ねるにつれて考え方やものの見方が枯れてきます。よく引き合いに出される例として黒澤明が挙げられるのではないでしょうか。確かに、「影武者」以降の黒澤作品を評価する声をあまり聞きません。しかし、私は「８月の狂詩曲」にしても「どですかでん」にしても面白いと思いましたし、遺作となった「まあだだよ」に至っては傑作だと思います。特に、所ジョージが黒澤組に加わって、とても味わい深い役を演じています。ちなみに、これらの作品を観たのは、まだＩＭＡの３階にミニシアターがあった時でした。確かに、彼が若い頃の作品のような、一気呵成に物語の世界に没入させるエネルギーはありませんが、年齢を重ねたからこそ描ける枯淡の趣きと他にはない創造性に満ちているように感じました。

それと全く同じことを感じるのが、「ハウルの動く城」以降の宮崎アニメです。私の故郷の鞆の浦で構想を練ったという「ポニョ」に至っては、その着想の発端となった水彩画を見せられても、いまだにその良さが理解できませんが、本人もどこかの番組で、年齢を重ねてくれば感じ方も考え方も変化するみたいな発言をしていました。その通りだと思います。いくら好奇心に溢れていても、対象も内容も視点も変容して当然です。彼の口癖でもある「面倒臭い」も、徐々に肉体的なことから心象面の葛藤に移行しているに違いありません。

鞆の浦で、ポニョの構想を練る宮崎駿

だとすれば、私自身が自分で疲労感を募らせ、肝心の五感が鈍り、虚しさを募らせているのは、年齢を重ねたからだと勝手に思いこんでいましたが、それは単に向上心を失っている言い訳に過ぎないのだと改めて思い知らされます。いつも、そして、いつまでも「黄金のような国」を探し求め続け、瑞々しい感性を研ぎ澄ませたいものです。

と同時に、ロバート・フルガムの「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」という本に書かれている「毎日、少し勉強し、少し考え、少し絵を描き、歌い、踊り、遊び、そして、少し働くこと」という言葉が蘇ってきました。それから、「不思議だな、と思う気持を大切にすること」という言葉も。

そう言えば、松本清張の短編に「老春」という作品があることも思い出しました。昭和３０年代に書かれた作品で、読んだ当初は気色の悪さばかりが前面に出ていましたが、今読むと、至って自然な感情であり、今日的なテーマです。それに、むしろここまで自分の感情を表に出せることは、極めて幸せなことなのではないかとさえ思います。

その松本清張は最期まで「枯れたくない」という趣旨の発想を大切にしているとの記事を、以前どこかの新聞で読んだ記憶があります。これもまた、自分なりの「黄金のような国」探しを追究しているということなのでしょう。いずれにせよ、人間いくつになっても素直でありたいと思います。

最後に脱線しますが、松本清張作品の題名について、「推理評論集」に、次のような一節がありました。

こういう抽象的な題名をつけるのは、実は締切りと関係があるのです。（略）ことに連載ものとなりますと、締切り前に予告というものが出ますので、題名を一応作らなければいけない。しかし筋はまだできておりませんので、どんな小説になってもいいような題名をつけておく。中身がないのだから、題名はつい抽象的になってしまう。それがすばらしいと褒めてくれるのであります。

こんなことで「砂の器」とか「けものみち」とかの、素晴らしいタイトルが生まれたのだとすれば驚きであり、まさに天才のなせる業と言って良いでしょう。

（終）